

3/10 常盤塾議事録

出席者 14 名

常盤先生、片平先生、古川さん、古城さん、出井さん、白井さん、松崎さん、大下さん、松山さん、松永さん、昌子さん、丸山さん、今田さん、安梅さん

アジェンダ

- ①一分間スピーチ
- ②常盤先生のお話
- ③発表後の議論

①一分間スピーチ

古川さん「北海道の病院で最新の医療機器を見た。全部コンピューターで、人間がコンピューターの中にいる気がした。」

古城さん「国立科学博物館の南方熊楠展に行った。彼はサバン症候群ではないかと思った。」

出井さん「サンディエゴの学会に出た。もどきの議論に近いものだった。いかに本物に近いものをたくさん作るか、落とし所をどこにするのが重要。」

白井さん「ドイツに行った。海外の若者は元気である。海外は人を育てる仕組みがあり、若者の自己肯定感が強い。日本にもその仕組みが必要だ。」

松永さん「パラリンピックの吉田さんと話した。We are の世界観を詠んだ詩人の素晴らしさに感動した。」

松山さん「中国では、政治において上位解脱の仕組みがよくできている。中国の成長を感じた。ただ貧困問題は根深い。」

松崎さん「最近 100 周年を祝う企業が多い。大企業でもこの先どう向かおうか迷っている企業が多い。伸びる企業はストレートでわかりやすい。」

昌子さん「インフルエンザワクチンが足りなかった。ワクチンは症状を緩和し、微熱が続くことがあるため、逆にしんどいケースもある。」

丸山さん「二者択一という言葉がある。円思考する人程決断が早い。しかし楕円思考で考えることも重要である。」

今田さん「1998 年はアルコール性膵炎で入院していた。死亡率 4 割だった。今思うと、お酒を飲んでいたのは現実が楽しくなかったからだ。」

安梅さん「ウガンダとガーナに行った。汚職が蔓延していて、不満がたまっている。そのため子供の教育に力を入れている。」

②常盤先生のお話

1. 南方曼荼羅

南方熊楠が書いた南方曼荼羅を見に行った。曼荼羅とは、仏教において、心の中や理想の世界を表したものである。南方曼荼羅の解釈をする研究者は多い。

南方曼荼羅を立体にすると、意味が浮き上がってくると思う。曼荼羅内の注にも、そのような記述がある。物事が集まり、ぶつかる「萃点」(砂漠の中のオアシスのようなイメージ)が重要である。カオスとコスモスが集まり、物が生まれて消えてゆく。この世そのものである。(南方熊楠の理論では、45 番目が萃、63 番目が既済、64 番目が未済で、ぐるぐる輪廻するイメージ。)

物を見て、ただすごいと思うだけでは意味がなく、紐解き考える必要がある。

昔の人々もこのようなことを考えており、人間が考えることは時代を超えて変わらないものもあると実感した。南方熊楠は世界の物事の多様性とながりが重要だと伝えたかったのではないか。

2. 本物とは何か、もどきとの対比

「化育」(自然が万物を生み育てること)という言葉がある。

「天地人」のことばに託された「人」の役割は、天地両方の働きを具体的に物として体現することである。「天地人三才」も人間のそのような生き方を推奨する言葉である。

平昌オリンピックの開会式でも、天地人の文字があり、天地人の調和を目指す意志を感じて感心した。普通なら見逃してしまいそうなワンシーンの映像だった。自分の情報のレシーバーを常日頃から高めておくとかこういう発見ができる。

漢時代に「天工開物」という本が書かれた。その中で、人は天の力を積極的に借りてものづくりをするべきだという記述がある。日本の江戸時代の職人も多くこの本を読んだ。

東洋は心と物を合わせたところに人があり、ものづくりがあると考えられていたが、西洋では心と物は分けられていた。この考えが元になり産業革命が起こった。もっと具体的に言うと、東洋では自然と人間は調和すると考えられ、西洋では対比するものだと考えられていた。この考えも自然科学の発達、技術革命を引き起こした。

今は科学の面に焦点が当てられている世の中だが、いずれ心の方に感心が戻ってくるのではないかと思う。

東洋はもどきを意識せず、その危うさや不完全さも合わせ一つになろうという姿勢だった。

漢方のツムラの広告が良い。自然が人間を強くすると述べられており、自然に感謝し調和する東洋的思考が現れている。

http://www.tsumura.co.jp/corporate/advertisement/newspaper/pdf/pdf_newspaper_180304.pdf(新聞掲載版広告 URL)

③発表後の議論（丸山さん『幸せの日本論』）

常盤先生「日本は本物のお金で、他国はビットコインのように見える。歴史においては地政学が極めて重要だったが、現在のグローバル化社会にあっては地政学要素が考慮されていない気がする。また、森という言葉は今の時代を表していると思う（豊かさや one for all など）。今のように森という言葉がメタファーで使われる時代はなかったのではないか。」

古川さん「ヨーロッパでは森はネガティブイメージで捉えられる。日本の方が生物学的にも多様性があり、豊かなイメージを持たれている。」

松永さん「神話ができる北方に地域では、森＝苔のイメージである。」

常盤先生「各社会で森の意味やイメージは違うので、そこに注意しなければならない。」

松永さん「森のイメージはこれから大事になる。これを AI にやらせようとする動きがある。コンピューターの世界では森のイメージが使いやすい。それに対し人体の研究をしている人は、人体の共鳴を主張する。」

昌子さん「ローマ帝国の皇帝の亡くなり方は自殺や暗殺が多かった。そのような歴史の積み重ねゆえ、持続可能なものを求める意識が現在高まっているのではないか。」

古川さん「文明母体自体は基本的に変わらないが、地政学的環境などに左右され形作られるのだと思う。」

常盤先生「現在のグローバル社会の中で、個性的な生き方を実現するためにはどうすればいいか考えなければならない。」

松永さん「アマゾン売り上げを投資し、人材費もかなり出して人材を引きこもうとしている。それを見ると、切り捨てる世界になるのではないかと心配になってくる。」

古城さん「中国はもっと危ない気がする。画像認識技術なども発展しており、世界でもトップである。」

丸山さん「これからの技術は倫理に触れる領域も多いが、中国はあまりそれにとらわれないので強い。」

常盤先生「今の時代、人間を情報化しようとしているのが怖い。人間には心の部分があるのに、フィジカルだけ扱って、人間は幸福になれるのか。」

松永さん「常盤先生がおっしゃったように、情報を感じ取るレシーバーを高めることが重要である。韓国人はそれがうまく、SNS 戦略なども圧倒的にうまい。」

丸山さん「今回の話は、「和」という言葉でも説明できる。」

松永さん「非という言葉もキーワードだと思う。」

片平先生「非は強い否定で、有の議論すらできなくなってしまう。」

常盤先生「「無」は力がある。」

片平先生「陶芸家は集中を極限まで高めて「無」になり作業する。修行の賜物であり、「無」の強さである。この感覚を言語化しているのがスティーブ・ジョブズである。日本語だと、「ゾーンに入る」など。また、日本の土地自体には価値はなく、日本人の血や築いてきたものに価値がある。」

常盤先生「日本人個人だと価値はでにくいけど、集団で見ると強い価値がでてくる。人と人との間に力がある。

松永さん「現在は SNS が主流で、若い世代はそれが当たり前。しかしメーカー側はそれがわからず、齟齬が生じている。」

片平先生「韓国は国のトップが大体逮捕される。サムスンも、社員が常に左遷やクビのリスクに怯えている。教授は肩書きを得ると急に偉そうになる。」

松永さん「人間が育っていく過程で、やはり幼少期から一番子供の側において教育する母親は重要だと感じる。母親の頭の良さも重要。」

片平先生「カーネマンを読んでいると、人間は未知の物事にネガティブだと述べられていた。日本人の特徴の一つとして、知らない人にフレンドリーという面があると思った。」